

「すべてが終わった時」

イザヤ書 第46章 10節～11節
ヨハネによる福音書 第19章 28節～30節

説教 岡村 恒牧師

「すべてが終わった」(ヨハネによる福音書 19章30節)主イエスが十字架の上で最後に口にされた言葉です。私たちはしばしば、すべて終わったという話をします。例えば、今日の午後には、今年もバザーが終わったと言います。卒業式を迎えると学生時代が終わったと感ずるでしょう。大事な仕事を満足して成し遂げることもあれば、楽しい時が終わってしまって、寂しく思うこともあるでしょう。何かが終わった時、更に続くものと、続かないものとがあります。今日のバザーが終わっても来年のバザーをすることができます。しかし、2度と繰り返すことのない事も多くあります。その1つが人生です。

ある人が、夜こっそりと主イエスの元に来ました。その名はニコデモ。パリサイ人で、聖書に精通し、人々を指導するような立場の人です。主イエスのお話を聞いて、この方は特別な方だと思いました。主イエスはニコデモに対して、人は新しく生まれなければ神の国に入ることはできないと言われました。赤ちゃんになって生まれ変わると言う事ではなく、神が与えてくださる本当の命をいただいて、新しく生まれるという話をされたのです。

主イエスは十字架にかけられた日、本当ならまともな証言が並べられ、死刑判決が下されるはずでした。しかし裁判になると証言は食い違い、総督のポンテオ・ピラトは、この人には何の罪もない、と宣言するに至ります。主イエスは無罪のまま死刑に処せられました。朝の9時ごろ十字架に磔にされ、昼の12時には世界全体が暗闇に包まれました。

主イエスは全知全能の神と等しい力をお持ちのお方ですから、十字架から降りてくることなどたやすいことでした。しかし最後まで十字架の上に留まり、苦しみ続けられました。当時、処刑を行うときに麻酔剤としてぶどう酒が飲まされたようです。1度目はお断りになって、十字架の苦しみをそのままお引き受けになった主イエスは、最後になって、酸いぶどう酒をお飲みになりました。聖書の言葉が全うされるためだったと書かれています。聖書に記されてきた多くのことが実行されました。「すべてが終わった」という言葉は、いくつかの翻訳では『成し遂げられた』としています。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」(ヨハネによる福音書 1章1節)天地創造の初めの時に父なる神と共におられ

たお方が、暗闇であるこの地上に、本当の光として来てくださいました。「私は光である」、「私は道である」、「私は真理である」、「私は命である」。繰り返し主イエスは、ご自分が何のために地上においでになったかを語られました。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3章16節)この神の計画が完成しました。主イエスが十字架の上で死んで下さったのは、主を信じる者が、永遠の命を得るためでした。

この神の計画には、不足や不十分な箇所はありませんでした。500年近く前、マルチン・ルターという人は、このことを再発見して大喜びしました。その当時、教会は誤解をしていたからです。救われるために、人間の側にも何かするべきことがある、例えば年に1回必ず司祭の前で告解をする必要があるというように考えられていました。そういうことを実行した者だけが神の国にはいるという誤解です。宗教改革は礼拝改革でもありました。礼拝において、何をしたら救われるかという話ではなく、主イエスの勝利宣言を繰り返し聞くようになったのです。私たちはただ一方的に神の恵みを受け取り、信仰のみによって救われる。このことが明らかにされました。

これは新しい教えではありませんでした。福音書が書かれた当時の教会が信じていた教えでした。今ここに、大阪教会が立っているのも、あの時、この信仰が再発見されたからです。この福音を世界中に伝えたいと願った人々が、イスラエルから旅立ちました。やがてアメリカから旅立ってこの大阪にたどり着いた宣教師たちによって、私たちの大阪教会が設立されました。

私たちは多くの信仰の先輩が聞き続けてきたこの宣言を一緒に聞いています。これは、そのまま信じて良い救いの約束です。この約束を信じて失望した者はいません。神に裏切られた者はいません。神は真実なお方だからです。主イエスの最後の宣言を私たちはもう1度聴き取って、そのまま受け取って、永遠の命を得て歩みましょう。「すべてが終わった」と主イエスは宣言をしてくださったのです。

(記 説教要約奉仕者)